

チャンスからチェンジへ

2025.9.10

夏休み明けの子どもたちへ向けた教育エッセイストの8月19日付の寄稿「変わるチャンス到来」を読み、深く共感した。「子どもでも大人でも、頑張っていると応援し助けてくれる人が現れ、ますます努力できる。認められると大きな自信になり、さらに前に進もうとする自分の背中を力強く押してくれる」。まさにその通りだと思う。

学校には学期という大きな節目があるが、毎日の生活にも小さなチャンスと思える場面が幾度も訪れているのではないだろうか。「チャンス」と思ったら少しずつ取り組みを重ねていけば、やがて「チェンジ」へつながっていく。その逆でチェンジの機会だと思ったら、ためらいやタブーを取り去ればチャンスになる。

子どもにとって夏休み明けの学校が「明日も行きたい温かい場所」であることを願う。私たち大人も子どもたちを見守りながら、チャンスを前向きに受け止め豊かな日々を送りたいものである。

この文章は、8月24日の福島民報新聞投書欄「みんなのひろば」に掲載されたものである。8月19日の同新聞教養欄には、「夏休み明けの子どもたちへ 変わるチャンス到来」というタイトルで私の拙稿が掲載された。この原稿を受けて書かれたものである。わずか5日後に載せられたということは、私の文章を読んで、すぐに投書欄への原稿を書いてくださったということになる。ありがたい。

文面から推察するに、学校関係者、あるいは以前、学校に勤務していた方であろうことには、容易に考えが及ぶ。だからといって、学校の先生、あるいは元先生かというと、そうではないものを感じた。やや客観的な距離感のようなものが感じられたのである。

いずれにせよ、私の文章では「チャンス」について書いたが、そこに「チェンジ」を加えてくださった。誠に勝手ではあるが、教育エッセイストとしての私のエッセイに対するアンサーニューエッセイとして位置づけさせていただきたい。2つの文章で、読者への一つのメッセージということである。

毎日のように文章を書き、世に出していると、反応が返ってくることがある。今回もそうである。よく考えると、実にすばらしいことである。自分の文章が、世の人のためになっているかもしれない。今まで、何となくはそう思えないこともなかった。今回の福島民報新聞への寄稿では、今まで以上に明確にそのことを意識することができた。常に読者意識をもちながら、文章、すなわちエッセイを書いている。これからは、さらに読者のことを考えながら書いていこうと思う。

今回、紹介させていただいた投書欄の原稿を読み、連絡をくれたのは義理の母である。お陰で、気づいたり、考えたりすることができた。何よりも、この原稿を書くことができた。改めて、義理の母に感謝したい。